

琵琶湖沿岸および伊庭内湖におけるホンモロコの産卵状況

亀甲 武志

1. 目的

これまで、琵琶湖北湖の主要な産卵場においてホンモロコの産卵状況を調査し、5月中旬から6月中旬の人為的な水位低下が卵の生残割合を低下させることを明らかにした。今年度は琵琶湖沿岸の2地点とホンモロコ漁業が1ヶ月間禁漁になった伊庭内湖の合計3地点でホンモロコの産卵状況を調査した。

2. 方法

大津市小野、湖北町海老江、東近江市伊庭内湖の3カ所において、湖岸距離約50～100mのヨシ・ヤナギ帯で3月から7月までおよそ週に1回の頻度で前年と同様の方法によりホンモロコの産卵状況を調査した。干出の評価は、卵が存在していた位置と琵琶湖河川事務所の琵琶湖の水位データをもとに、調査日から7日後まで水面上にあった卵を干出・死亡卵、調査日から7日後まで水面上にも水面下にもあった卵を干出・生残不明卵、調査日から7日後まで水面下にあった卵を生残卵とした。

3. 結果

産着卵は4月上旬から6月下旬まで確認された(図1～図3)。産卵のピークは場所によって違いがあり、大津市小野、伊庭内湖、長浜市海老江の順に早かった。しかし、いずれの地点においても産卵のピークは琵琶湖水位が低下する5月下旬から6月中旬にみられたことから、干出・死亡卵や生残・不明卵の割合が高くなった(図4)。このことから産着卵が認められた後は、孵化するまでの期間、水位を維持することが重要であると考えられた。

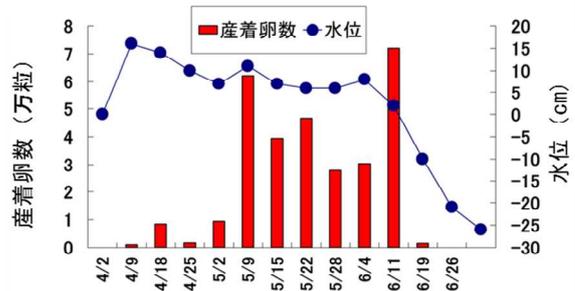


図1 大津市における産着卵数の推移

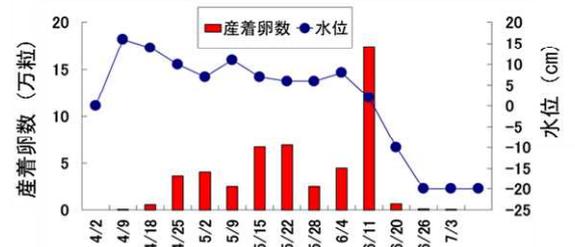


図2 伊庭内湖における産着卵数の推移

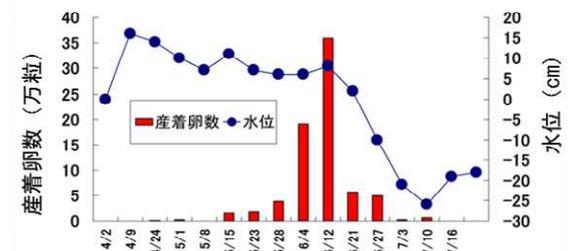


図3 長浜市における産着卵数の推移

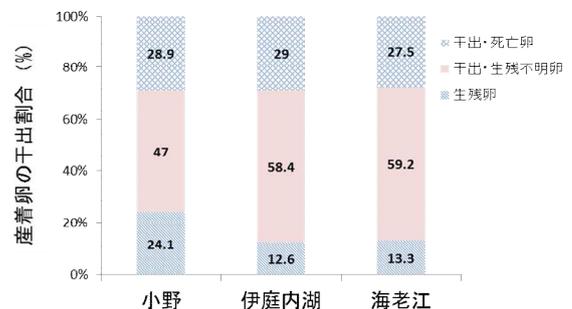


図4 場所ごとの産着卵の干出状況